

## 第3回 徳島市SDGs未来都市実現協議会 会議録（要旨）

と き 令和6年8月9日（金） 午前10時～11時45分

ところ 徳島市役所8階 庁議室

出席者 委員10人、事務局

### 1 開会

### 2 委員紹介

### 3 会長挨拶

（会長）

徳島市がSDGs未来都市に選ばれたのが2022年で、今年で3年目を迎える。世界の共通言語SDGsと言われているが、一人ひとりの市民がSDGsを自分のこととして、日常生活の中で意識できているかと言えば、まだまだ言葉の空中戦に陥っている点が多いのではないかと感じている。

そこで本協議会として、徳島市の1つのブランドとしてSDGsを本気で実践して、住みやすく、レジリエンスの強い徳島市を作っていっているというスタンスを示していきたいと考えているので、本協議会では皆様より自由闊達なご意見を頂戴したい。

### 4 議題

#### （1）徳島市SDGs未来都市計画の進捗評価について

（事務局）

資料1「SDGs未来都市等進捗評価シート」に基づき説明

（委員）

徳島市は、人が優しい、山も川も海も身近にある、食べ物おいしい。私は徳島市が大好きだが、指標の1つである「徳島市に住み続けたいと思う市民の割合」が2021年度の当初値より低下している。周りではマイナスの声はあまり聞くことはないが、低下した要因の分析は行っているのか教えていただきたい。

(事務局)

「徳島市に住み続けたいと思う市民の割合」については、毎年市民3,000人を対象にアンケート調査を実施し割合を把握している。詳細分析は行っていないが、コロナ禍の本市の社会増減はプラスマイナス0程度であった一方、コロナ後は本市から都会へ転出する人が増え、都会から本市へ転入する人が減り、大幅な社会減となっており、このあたりが結果に影響しているのではないかと思われる。

(委員)

都会へ人口流出しているのは、働く場所が少ないなど複数の要因が考えられる。私に関わっている外国人の就労支援事業の中では、一旦都会に出るが、物価高や生活費の高騰、人とのつながりが希薄といった理由から地方へ戻ってきたいという希望を持つ人が非常に多い。都会に出て馴染めない人に対して、就労支援などの戻ってきやすい仕組みづくりも大切である。要因分析を行うことで、徳島市っていいな、戻って来て良かったなど思ってもらえる取組を行うことが可能となり、住み続けたいと思う市民を増やすことにつながると思うので、要因分析と情報共有をお願いしたい。

(事務局)

はい。

(委員)

全国どこもそうであると思うが、人口が増加に転じることはまずあり得ないのではないか。徳島市も同様であり、人口が減るということは、歩行者数など、人口に関することは全てマイナスになる。もし徳島市の人口が増えるとするならば、それは人口の奪い合いであり、近隣の市町村は人口が減るとことを意味し、全体としては何も変わらない。これからは人口が減ることを前提として、SDGsの計画を考えていかなければならないと思う。

街中を歩いているとSDGs未来都市の看板を目にする機会が増えたと感じている。庁舎やアミコ、公用車など、多くの市民の皆さんが目にしており、啓発活動は成功していると思う。さらに市民一人ひとりが意識を持って持続的に取り組んでいくことが重要であると感じている。引き続き啓発活動を進めていただき、市民の意識を変えていってほしい。

## (2) 徳島市における SDGs の取組について

(事務局)

資料 2 「令和 5 年度 徳島市における SDGs の取組について」に基づき説明

(委員)

SDGs 未来都市フォーラムの参加者数、ロールモデルの取材・発信の閲覧数、こども未来チャレンジの参加者数、シェアカーの利用者数の実績を教えてください。また、フラッグや懸垂幕掲出の効果について、市としてどのように評価しているか教えてください。

(事務局)

SDGs 未来都市フォーラムについては、70 名弱の方に参加いただいた。ロールモデルの取材・発信における本市公式 note の閲覧数については、把握していない。こども未来チャレンジについては、とくしまマルシェの会場で開催しており、チャレンジ単体での人数は把握できていない。シェアカーについては、5 台のうち、平日の公用車としては 1 日 3 台～4 台稼働しており、休日の利用は週に 1 台稼働している程度である。シェアカー自体を市民が知らない、観光客もそこにシェアカーがあることを知らないという状況にあったが、春休み・ゴールデンウィークなどの長期休暇中に利用が広がっており、今後もさらなる周知に努めたい。基本は公用車として使用するものであるが、休日に市民が使用してくれることで、ランニングコストの低減、資源の有効活用につながっているため、事業としては評価して良いと考えている。

フラッグ等のプロモーションの効果については、毎年市民 3,000 人を対象にアンケート調査を実施し、SDGs の認知度を計っており、年々上昇しておりプロモーションの効果を感じている。

(委員)

ひょうたん島とその周辺の中心市街地エリア内を運行する乗合バス「のるーと」を徳島市は実施しているが、これも SDGs の取組としても良いのではないか。

(事務局)

中心市街地活性化のひとつとして取り組んでいるが、公共交通の活用、持続可能なまちという点では、SDGs と関連するので、今後も連携して取り組んでいきたい。

(委員)

セブンイレブンと連携してペットボトルの回収をしているが、実現は難しいかもしれないが、スーパーと連携して、廃棄商品を必要とするところに配布する取組をしてみてもどうか。

(会長)

廃棄とは違うかもしれないが、賞味期限が近づいた食品を集めて寄付をするフードドライブに取り組んでいるスーパーがある。このような輪が広がれば良いと思う。

(委員)

フリマアプリを活用したごみの減量化にも取り組んでいるとのことだが、メルカリで行っているのか。また、市が収集した粗大ごみを出品しているのか教えていただきたい。

(事務局)

本市では「メルカリ」「おいくら」「ジモティー」の3つと連携協定を締結し、リユースの啓発を行っている。そのうちメルカリに関しては、徳島市自身が出品者として不要になった使用可能なものなどを出品している。おいくらとジモティーについては市民の方に知ってもらってリユースしてもらうためのPR活動として連携している。

他都市では集めた粗大ごみを出品している例があり、本市も検討したが、実現に至っていない。

(委員)

ぜひ実現したいと思う。

(事務局)

現在、本市は粗大ごみを小さくして収集する粉碎収集の形を取っている。出品するためにはそのままの形で収集する必要があり、回収コストがかかり、回収方法を抜本的に見直す必要があり断念した経緯がある。

そこでまずは粗大ごみとして出す前に、市民自らがリユースできないか検討し、業者が家へ査定に来てもらい買い取ってもらう「おいくら」や市民が直接地元の人へ販売する「ジモティー」と連携協定を締結し、啓発活動を行うこととしている。

(委員)

セブンイレブンでペットボトルの回収を実施されているが、徳島市はペットボトルの回収をしてもリサイクル率が低いという新聞記事を1か月ほど前に見た。セブンイレブンの店舗で回収をしているものは、セブンイレブンが会社として回収をしてリサイクルしているもので、徳島市がごみ収集車で回収をしているのはリサイクルをせずに埋め立てしているという認識でよいか。

(事務局)

セブンイレブンでの取組はセブンイレブンが独自に回収し、リサイクルを行っているものである。徳島市が回収したペットボトルには、リサイクルができず、埋め立てに回っているものがある。本市では缶・ビン・ペットボトルの混合収集を行っており、ペットボトルだけを水平リサイクルすることは技術的に難しく、リサイクル率が高まっていない現状がある。リサイクル率が高い地域については、ペットボトルのみを単独で回収し水平リサイクルを行っている。単独で回収するためには、先ほどの粗大ごみと同じく、収集体制の見直しが必要になってくる。

(委員)

市民としては、収集された缶・びん・ペットボトルがリサイクルされているという認識だが、徳島市では混合収集で、缶やびんなどの分別できないため、リサイクルができず、埋め立てられるということか

(事務局)

詳細は把握できていないが、リサイクルしていると思う。先日報道されたのは、ペットボトルについての記事だが、収集したペットボトルには汚れなどがあり、リサイクルできずに埋め立てられているものが多くあるということであった。

(委員)

収集された後、種類ごとに分けてリサイクルすると思っていたが、そういうことはせずに全て埋め立てているのか。

(事務局)

全てを埋め立てているわけではないと思う。

(委員)

分けていると思うが、混合収集する際に、ペットボトルに汚れが付着するため、リサイクルに回せないものが多くあるということではないか。

(委員)

徳島市内の大学でも、学生が缶・ビン・ペットボトルをまとめて出しており、本当にそれで良いのだろうかと前から疑問に感じている。例えば、藍住町では洗浄したペットボトルを、決まった曜日に各地区の拠点に設置された回収箱まで持って行き、リサイクルを行っており、地域住民にもリサイクルが定着している。

リサイクルはSDGsの取組の中でも非常に重要なことであるので、処理の工程を担当部署に確認いただき、徳島市の処理の仕方について本協議会で共有いただき、議論をしていくべきであると考えている。そうすることでさらに徳島市も様々なことにチャレンジできると思われる。

(会長)

徳島市の処理工程について、事務局から協議会へ情報提供してほしい。

(事務局)

はい。

(委員)

SDGs 未来都市フォーラムの参加者が70名弱と報告があったが、広報周知の方法など、今後の参加者確保のための課題を教えてください。

(事務局)

広報については、広報とくしまやSNSを活用した。今年度については、早い時期から広報を行うことや、様々な取組を通してSDGsに関心を持ってもらう市民の数を増やすなどして、参加者数を確保につなげたい。

(委員)

実際に来られた人がどのような人だったか分析して、そこからさらに垣根を払って参加者を増やしていけるよう、工夫を行っていただきたい。

(会長)

市からの周知も大事だが、我々協議会のメンバーも積極的に関わっていくことが必要であるのではないかと思う。

### (3) 令和6年度 SDGs 推進事業について

(事務局)

資料3「令和6年度 SDGs 推進事業について」に基づき説明

(委員)

一人ひとりの市民が将来のことを考え、少しでも改善していこう、小さなことから取り組んでいこうという意識を持ってもらうために広報活動を進めていただきたい。例えば、南海トラフ地震に対する事前準備を呼びかけるなど、防災に関することも重要な SDGs であると思う。

(委員)

Policy Fund を活用した企画募集の取組は既に始まっているのか。また、募集は継続的に行うのか教えていただきたい。

(事務局)

本取組は、イベントのような一過性のものに対する助成ではなく、地域で解決できていない課題に対して、今ない新しい仕組みを導入して解決するために民間と市が連携して社会実験を行う事業で、現在、Policy Fund を活用した実験は全国で4自治体が行っている。本市においては5月からホームページ等で募集を開始しており、既に応募があり審査を行っている状況である。寄付者が是非やってもらいたいという取組に対して助成を行い、市はお金を出すのではなく、フィールドの提供などでサポートを行うスキームとなっている。

募集の継続については、4つの自治体があるので、本市ばかりで活用すると他の自治体の枠がなくなってしまう可能性があるため、Poli Poli が全体のバランスをとることになる。事業費も内容によって大きくことなるため、1つ採択されたら募集終了とするわけではなく、継続的に募集を行うこととしている。

(委員)

この取組の趣旨とは違うかもしれないが、本協議会のメンバーも様々な団体に所属する方で構成されている。SDGs の取組に協力できることもあると思うので、市から強く働きかけをしてほしいと思う。

(委員)

昨年度のジェンダー部会でも男性と女性の年代ギャップを課題にあげて、女性がかんばる形から男性が女性の働き方・生き方に近づく施策にシフトした方が、持続可能性が高まるのではないかと提案をしてきた。

一般的に、行政は提案に対して、その理念を理解しても、施策として具体化するまでにタイムラグがあり、個人的には10年程期間があると感じている。現場から提案し続けて、トライアンドエラーを繰り返しながら、行政が予算をつける展開であった。

しかし最近、これまではあまりなかったが、県の担当者が現場に来て、現状と課題のヒアリングをする機会が増えてきたと感じている。こういった、一人ひとりの思いに耳を傾けるということが、人口が減少していく中で、効果的に施策を考えるために、特に重要になってくるのではないかと現場で感じている。SDGs といえば資源や環境に目が行きがちであるが、「人」が持続可能な働き方・生き方ができるように、徳島市の職員もこれまで以上に現場で活動している人の声をヒアリングして、本当に現場が必要としている事業につながる、今いる「人」を大切にできるような予算の活用につなげていただきたい。

(委員)

太陽光パネルリユースの実証実験は全国ではじめての取組か教えていただきたい。

(事務局)

全て調べられているわけではないが、恐らく全国はじめての取組である。

(委員)

この実証実験を通じて、リユースパネルが地域の集会所や体育館の電力確保や蓄電などに活用できれば、新規設置の際のコストを抑えながら、災害時における電力確保、熱中症対策などに効果が期待できるのではないかと感じた。

(委員)

徳島市の SDGs 事業の予算はいくらか教えていただきたい。

(事務局)

本課で確保している予算は 500 万円程度あるが、SDGs に関連する取組は各課様々な事業を行っており、全体としての予算額は把握していない。

(委員)

SDGs と一言で言っても非常に幅が広いが、SDGs は人が生きていくためのものであると思うので、津波避難計画や温室効果ガス総排出量など、人の命に係る取組については、2030 年の目標達成を待たずして、前倒して進めていっていただきたい。

温室効果ガス総排出量については、電力使用量に電力排出係数をかけて算出されており、その係数の影響で指標が悪化しているという説明だが、まずは電力使用量の増減について議論すべきではないかと思う。

また、省エネに取り組んでいると感じる市民の割合については、2023 年度 62.3%と 2024 年度の目標値の 62.0%を既に達成できているが、さらに加速させても良いと思われる。今後、計画を見直す予定ということなので、そのタイミングで優先順位の強弱があっても良いのではないかと感じた。

(委員)

地域の小さな地区が集まったの徳島市だと思うので、地区個別の課題に対して、それぞれ解決策を考え、取り組めば、1つ1つのまちが良くなり、徳島市全体が持続可能なまちになると思われる。

(委員)

ボランティアに参加する高校生・大学生の中には、徳島が大好きでずっと住みたい、社会を良くするアクションを自発的に取り組んでいきたいといった志を持った子たちが少なからずいる。人口が減っていく中で、そういった志を持ったスーパースターをいかに発掘できるかがこれからの未来を左右するのではないかと感じている。

そういう人たちが生まれる体験価値が各種企画に埋め込まれているのだろうか。おもしろかった、貢献できた、ありがとうと言ってもらえるような仕組み、仲間同士で団結できる仕組み、このようなことを考えてワークプログラムを作っていくことが大切である。各種企画で市民を巻き込むときにどうやって意図的にこれを設計するか、

体験価値へのこだわりを持つべきであると思う。徳島市というよりは、実現協議会の委員が現場や学者の立場のエッセンスを入れて、体験価値設計をしていくべきであると思いの議論を通じて感じた。

(会長)

フォーラムの形式について、セレモニーとして表彰式をすることについては構わないと思うが、その後で、参加者が壇上にイスを向けて登壇者の話を聴くだけの形式はやめてはどうか。先ほども委員の皆様から意見があったように、現場の声が聞ける、参加して良かったと感じられる、そういったプログラムにすることが必要である。

そこで、参加者がディスカッションやワークショップを行って、参加した人の意見を徹底的に拾いあげる、そういう形式で開催してみてもどうか。それをテストパターンとして、大学・コミセン・学校などでのワークショップ開催に広げていくための第1弾としてはどうだろうか。事務局としてはどうか。

(事務局)

企画内容については検討中であるので、昨年と同じ形式にこだわっているわけではない。

(会長)

協議会としても全面的にサポート・協力する形でやってみてはどうかと思うが、委員の皆様はどう思うか。

(委員)

過去に参加したワークショップで、地域課題に対して自分たちは何ができるかを高校生と社会人が一緒に考える企画があった。複数のテーマについて、1回30分、メンバーを変えて4回行った。一人ひとりの思いに寄り添うことが人と人の連帯感を生み、人がつながることができると感じた。

また、外国人の支援団体に携わる中で、外国人一人ひとりの思いをどのようにしてみんなで実現しようか座談会を実施したことがあり、専門家を交えて意見交換を行った。人と人がつながることで、実際に思いを実現することにもつながった。多様性があるほど、人・経験・視点がつながり、思いが次の行動につながる実効性のある素晴らしい企画となる。それを市が開催するという事は、市民にとって身近に感じられるのではないか。企画がまだ固まっていないのであれば、みんなで取り組めるような

ワークショップができれば良いのではないかと感じた。

(会長)

フォーラムは実現協議会共催になっている。今年は実現協議会も一緒になってディスカッションを行う、そのような方向で進める方向でよいか。

(各委員)

異議なし。

(副会長)

徳島市に住み続けたい市民の割合については、世代によって見えている世界が異なり、高齢の方は住み続けたいという回答が多くなっていると推測される。どの世代がどう思っているのか、誰に対してSDGsを拡げていくか、もう少し細かく分析しなければならない。現場の実情など、市民の声を知らないと、分野を横断的に計画しなければならないので、解像度をあげることは引き続き行っていただきたい。

過去、パートナーシップ部会を船上で行ったことがあるが、違う環境で景色も変われば、話すことも気さくになったこともあるので、次のフォーラムについては、新しい形で、実現協議会の委員も協力して、徳島市とともにSDGsを推進していきたい。

## 5 閉会